

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20724

研究課題名（和文）訪問看護師のリスク管理に関する安全教育プログラムの構築

研究課題名（英文）Construction of safety education program on risk management for home visiting nurses

研究代表者

吉松 恵子 (Yoshimatsu, Keiko)

島根県立大学・看護栄養学部・助教

研究者番号：30642657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：訪問看護ステーションのリスク管理について、管理者6名とスタッフ5名に対してインタビュー調査を実施し、療養者の生活の場を考慮した取り組みを療養者、家族と看護師が協働して実践する必要があることが明らかとなった。これらの結果を基に、訪問看護の特色に合わせたインシデント報告の活用について研修と実践を行う安全教育プログラムを実践した。集合研修でインシデントの報告と検討を実施できる「発信シート」を作成した。各事業所で6か月間実施したのちに、書面による情報交換を実施し、実践報告と「発信シート」を検討した。また、教育プログラムの前後にアンケート調査を実施し、インシデントの検討会への参加の増加などがみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文献検討とインタビュー調査により、訪問看護師のリスク管理に対するとらえ方や取り組みには違いがあることが明らかとなった。参加者が訪問看護の特色に合わせたインシデント報告の用紙と活用方法を検討することで、より実践につなげることができる「発信シート」を開発できたことには意義があると考えられる。また、事業所での「発信シート」の活用の実践を行うことで、実施後のアンケート調査より、「他のスタッフのインシデント報告の記載が増加した」等の波及効果も見られていた。医療安全対策を検討する上でインシデントの報告は重要であり、訪問看護師のための「発信シート」の開発には意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：I interviewed 6 administrators and 5 staff home visiting nurses about home risk management of home visiting nursing. The survey revealed that visiting nurses need to collaborate with clients and their families to implement nursing activities that take into account the life place of client. Based on these results, I conducted a safety education program that included training and utilization, including consideration of incident reports tailored to the characteristics of home visiting nursing. We have created "outgoing sheet" that enables incident reporting and consideration at the workshop. Participants used the "outgoing sheet" for 6 months at the place of the home visiting nursing agency, and we exchanged information on the practice report in writing and examined the contents of the "outgoing sheet". I also conducted a questionnaire survey before and after the educational program. As a result, participants increased their participation in incident review meetings.

研究分野：在宅看護論

キーワード：訪問看護 リスクマネジメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

入院期間の短縮に伴い、医療依存度の高い在宅療養者が増加しており、訪問看護師は医療事故を未然に防ぐ認識を高め、療養者宅で起こりえるリスクを予測し、安全なケアを個々の療養者に合わせて確実に実践できる知識や技術が必要である。医療事故防止の様々なアプローチの一つに個人を追求するのではなく、原因を追及するヒューマンエラーへの対策が挙げられる(中島ら, 2003)。訪問看護師は単独で訪問することが多く、インシデント発生時に他者からは気づかれにくいことから、インシデントレポートを記載するかどうかは当事者の判断に委ねられている。2014年の島根県の調査(吉松ら, 2015)において、1年以内にインシデントを経験した訪問看護師は約5割であるが、そのうちインシデントレポートを記載している看護師は2割に満たない。記載していない理由として、医療安全への意識の低さ、忙しさから記載していないなど様々な要因が考えられるが実態は明らかになっていない。しかし、医療事故防止のためには、インシデント事例から原因を認知し、予防対策を立案、業務につなぐような安全管理の体制を確立することが必要である。

在宅におけるリスク管理の実態調査において(緒方ら, 2006)対象者の所属する訪問看護ステーションの約7割が安全管理体制を有しているが、訪問看護業務との兼務で、リスク管理に専念できる時間を取りがたい状況であり、人的資源や研修機会の不足などの課題が述べられている。一般には、訪問看護ステーションでは管理者がリスク管理の中心を担っていると考えられ、2014年の島根県調査でも、管理者はスタッフよりストレスの原因である量的負担のストレス度が高いことが示された。これらのことより、訪問看護ステーションの安全管理体制を整えるには、管理者中心ではなく、訪問看護師全体の安全に対する意識を向上する支援が必要である。しかし、訪問看護師の安全に対する意識や医療安全管理体制を整えるための支援方法について調査された研究は緒方の報告以降ほとんどみあたらない。そこで本研究では、訪問看護ステーションにおけるリスク管理の現状と課題、背景要因を把握し、訪問看護師が訪問看護の特色に合わせたインシデントの報告用紙作成と自己の訪問看護ステーションにおいて実践を行う参加型の安全教育プログラムを構築することで、医療安全に対する意識向上を図る。

2. 研究の目的

訪問看護ステーションにおけるリスク管理の取り組みの現状と課題、それらに関連する背景要因を明らかにし、訪問看護師への安全教育プログラムを構築すること。

3. 研究の方法

本研究では、文献検討と訪問看護師のインタビュー調査を行い、その後、訪問看護の特色に合わせたインシデントの報告用紙作成と自己の訪問看護ステーションにおいて実践を行う参加型の安全教育プログラムの実施、評価を行った。研究は所属機関の倫理申請を受け実施した。

1) 文献検討

訪問看護におけるインシデント、アクシデントに関する文献を収集し、研究の動向を明らかにすることを目的に、文献検討を行った。

医学中央雑誌 Web 版(以下医中誌とする)、CiNii において「訪問看護」と「インシデント」、「アクシデント」、「リスク管理・リスクマネジメント」をキーワードに検索した。検索された研究論文のうち、会議録は除外した。検索範囲は介護保険が施行された 2000 年~2017 年とした。

2) 訪問看護師に対するインタビュー調査

訪問看護ステーションにおけるリスク管理に関する訪問看護師の態度の実態を明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施した。

対象者は、A 県の指定居宅サービスに登録されている 71 か所のステーションのうち、ステーションの規模を常勤換算 2.5 名以上 5 名未満、5 名以上 7 名未満、7 名以上の 3 群に分け、研究協力の得られた管理者を各規模から 1~2 名ずつ、スタッフ各規模から 1~2 名ずつとした。インタビュー内容は訪問看護師がリスク管理についてどのように捉えているか、実際どのような取り組みを自由に語っていただいた。管理者とスタッフごとに語られた文脈を重視し、「リスクマネジメントに対する態度」について、まず、語りから単独で理解可能な最小単位の言葉や文節を取り出した。次に、それらの共通性や関連性のあるものを、分類しながらサブカテゴリーを抽出した。最後に、サブカテゴリーの関係性や類似性、相違性などによって比較、分類しカテゴリーとした。

3) 安全教育プログラムの実施

文献検討、インタビュー調査の結果を基に、訪問看護の特色に合わせたインシデントの報告用紙作成と自己の訪問看護ステーションにおいて実践を行う参加型の安全教育プログラムを検討した。安全教育プログラムを実施することにより、訪問看護師のインシデントに対する認識の変化を明らかにすることで、プログラムの評価を行った。

対象者は、A 県の指定居宅サービスに登録されている 80 か所のステーションのうち、ステーションの規模を常勤換算 2.5 名以上 5 名未満、5 名以上 7 名未満、7 名以上の 3 群に分け、各群より訪問看護経験 2 年以上の看護師 2 名程度とした。

安全教育プログラムの構築内容

安全教育プログラムは右図のように計画した。

研修1回目では、医療安全対策の基本に関する講義、事前調査から得られた情報の提供、インシデント事例の報告・活用方法に関するグループワークを実施した。医療安全対策の基本として、安全対策を考えていく上で基本となる、人間特性や安全対策の概念について理解することを目的として外部講師による講義を行った。そののちに、事前調査から得られた訪問看護における医療安全対策の現状と課題について情報共有を行った。その後、グループワークを行い、訪問看護ステーションにおけるリスク管理の現状と課題を明確にし、訪問看護の特徴に合わせたインシデント報告と活用方法を考案した。

研修終了後、研究者によりグループワークでの検討結果をもとにインシデント報告様式と活用方法を作成した。研究参加者は、勤務する事業所において、6か月間実践をおこなった。

実施後、文書にて、インシデント報告の活用実践の報告、インシデント事例の報告・活用方法の再検討について意見交換を実施した。

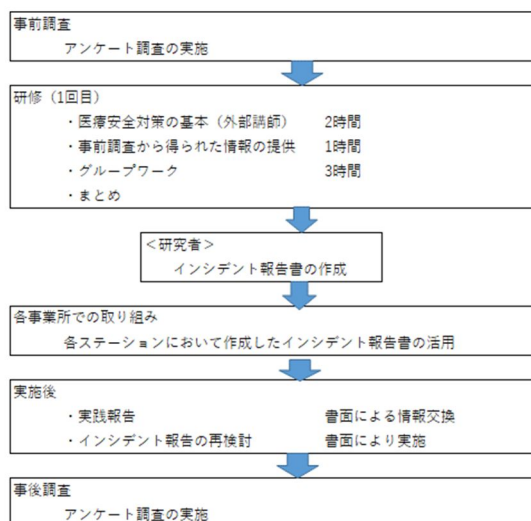


図1 研究実施計画

実施前後のアンケート調査の実施

教育プログラム参加者に対し、無記名自記式の質問紙調査を行った。調査内容は、対象者の基本情報として年齢、訪問看護の経験年数、雇用形態などを調査した。医療安全への取り組みとして、研修への参加、インシデントの報告、検討会の参加状況を調査した。医療安全に対する認識の調査として、山岸ら（2007）の作成した安全文化の測定尺度を作成者の許可を得て使用した。医療安全のために必要と考える行動を自由記載していただき、質的帰納的分析した。

4. 研究成果

1) 文献検討

文献は、2003年～2010年までが6文献、2011年～2016年が4文献であった。研究対象者は訪問看護師または訪問看護ステーションの管理者が最も多く、ほかには文献研究や訪問介護職、保健師を含むものがあつた。

インシデント・アクシデントの対象者は3文献が療養者のみ、3文献が看護師のみ、4文献は療養者と訪問看護師であつた。

2011年までの論文で療養者・家族をインシデント・アクシデントの要因として挙げている論文は1文献であるが、2012年以降の3論文すべてで看護師だけでなく、利用者・家族も含んでいた。インシデント・アクシデントの発生場所は、すべての文献で療養者宅が挙げられており、5文献は移動中も挙げられていた。現在、訪問看護におけるインシデント・アクシデントの対象・要因・発生場所についての統一されたとらえ方はなく、リスクマネジメントのために居宅におけるインシデント・アクシデントの共通の考え方、検討体制を整えていく必要があると考えられる。

2) 訪問看護師に対するインタビュー調査

インタビューは6名の管理者と5名のスタッフに対して実施した。管理者の平均年齢は54.3±4.2、スタッフの平均年齢は48.6±8.3歳であつた。訪問看護師のリスクマネジメントに対する態度は、()リスクの予測と回避、()生活の場における医療安全の取り組み、()インシデントへの対応で構成されていた。管理者はそれに加え、()管理者としての医療安全への取り組みを実践していた。訪問看護師のリスクマネジメントは、療養者の生活の場を考慮した取り組みを療養者、家族と訪問看護師が協働して実践する必要があることが示唆された。

3) 実施前後のアンケート調査の実施

対象者の年齢は平均49.0±10.7歳であり、看護師経験は平均24.1±10.6年、訪問看護経験は平均10.7±9.1年であつた。管理者が3名（50.0%）、スタッフが3名（50.0%）であつた。研修において、インシデント報告書の様式と活用法についての検討を行い、報告と分析を行うことができる「発信シート」を作成した。分析には、河野（2015）が提唱した従来のSHELL分析に「m（management：管理）」を加えたm-SHELLを用いた。各事業所で6か月間実施したのち、実践報告を書面により行った。アンケート調査では、直近3か月間のインシデント報告書の記載は実施前0.5±0.8回から実施後3.8±3.7回、インシデントに関するカンファレンスの参加は実施前

2.5±2.4回から実施後4.4回±3.4回となった。医療安全ために必要と考える行動では、実施後に「インシデントを発信しやすい環境を整える」ことが必要と考えていた。実施後のアンケート調査より、「他のスタッフのインシデント報告の記載が増加した」等の波及効果も見られていた。今後は、参加者へのインタビュー調査などを実施し、「発信シート」の内容と使用方法についてさらに検討していく必要がある。

<引用文献>

- 河野龍太郎：医療におけるヒューマンエラー なぜ間違える どう防ぐ,56-60,医学書院,2015
中島和江、八田かずよ、武田裕：クリニカルリスクマネジメントナーシングプラクティス、文光堂、2-13、2003
緒方泰子、橋本迪生、福田敬：在宅ケアにおける適切なリスク管理に向けた基礎的研究、医療と社会 15(3) 23 - 36、2006
山岸まなほ、秋本万里子、伊藤勝陽、横井香織、小林敏生：病院職員の医療安全に対する意識と行動、病院管理 44(1), 7-17, 2007
吉松恵子、中谷久恵、三原かつ江：訪問看護の医療安全におけるリスク管理、第20回日本在宅ケア学会学術集会,134,2015

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉松恵子
2. 発表標題 訪問看護における管理者のリスクマネジメント
3. 学会等名 第23回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉松恵子
2. 発表標題 訪問看護におけるインシデント・アクシデントに関する文献検討
3. 学会等名 第31回日本看護研究学会中国・四国地方会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉松恵子, 中谷久恵
2. 発表標題 訪問看護における管理者のリスクマネジメント
3. 学会等名 第23回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----